

グツバイダーリン

亀

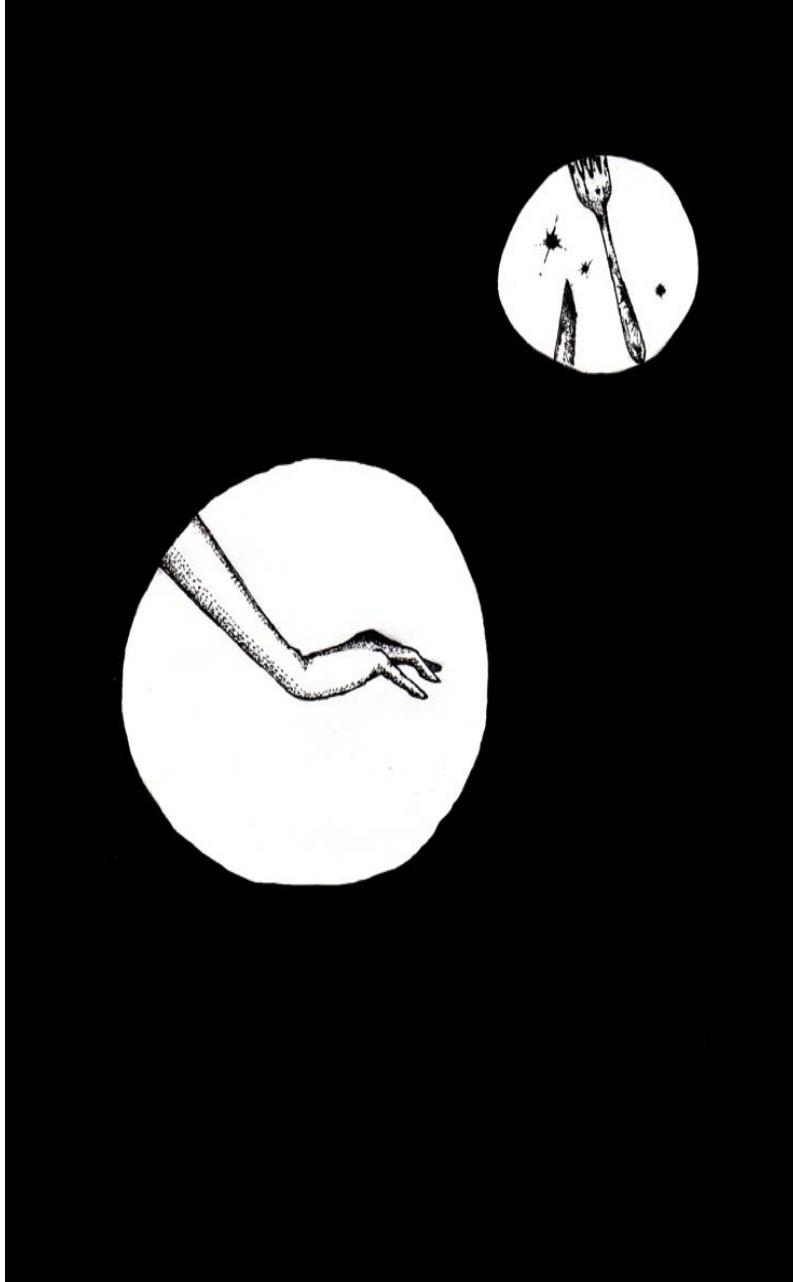
喧騒はいつだつて遠くに聞こえる。あたしはその輪の中で生きていけないの。海水が傷口に浸みこむように、周りの声はあたしを不愉快に触んでいく。喧騒の原因が祭りだつてことくらいは知つているのだけれど、それ以上のことは忘れてしまつた。クラスの女の子たちが男の子を連れ添つて夏季講習の合間を縫つてわざわざ行つてくるとは言つていたけど、そんな中に行く意味が見当たらなかつた。だつて、踏切の奥を覗いても、祭りの中を探しても、あたしの探すあの人はないんだもの。いたとしても、あたしの望む姿なんてしていよいよ。知つてはいるわ。知つていたところで、わずか、希望は残つてしまつていて、どうにかしてそれをスプーンでくつ

て食べてしまえたら、と思わずにはいられない。それくらいの希望なら、きっと食べたところで甘い味だけが残つて私が幸せに終わると思うから。そんな希望を打ち消してみたくて、ぶらつと歩いた。きっと、歩けば、もっと周りを見渡せば絶望を突きつけてくれるつて、信じているの。一番手前の、少し人ごみから外れたところに露店を出しているタコ焼き屋さんまで行つてみた。ここならまだ、あたしはあたしのかたちを保つていられる。

「お嬢ちゃん、タコ焼きいるかい？ 安くしたげるよ」

「うーん、それじやあ、一パック頂戴」

唇がぬるりと動いていく。店のおじさんの唇も、



気持ち悪く笑顔を作った。きっとおじさんが厭らしく見えるのは、あたしの心もちが厭らしいからなのだろうけれど、そんなことは前から知っていた。誰かが笑うたびにそれを突きつけられるのは辛いけれど、もう辛いことに慣れてしまっている自分もいる。

「タコ焼き、大きいんですね」

奥に見えるタコ焼き器の穴は、野球ボールくらいの大きさだった。おじさんはあたしに背を向けるようにしてその中に生地を流し込んでいく。火が通るのに随分かかりそう。タコ焼きをそこまで無理して大きくする理由はあたしには見当たらない。

「タコも大きいんですね？」

「ま、そうだねえ」

おじさんは笑う

「焼くまで時間かかるから、世間話でもしようか」

「世間話ですか？」

「そう、世間話だよ。くだらない話だ。機材が大きすぎて、そちらを向いて作業出来ないのが申し訳ないんだけれどねえ、まあ、それを気味悪がつて欲し

くないんだよ。例えは顔の見えない俺みたいな人間だつて、くだらないことを考えてくだらなく生きている。お嬢ちゃんだけはどうだろ？」

「はあ」

「世間というのは仏教用語で『移り変わり、破壊を免れない迷いの世界』を指す言葉らしい。そのお話をすればいいのさ。迷いの世界とは自分だと思うのなら、自分の話をしてもいいし、高尚な持論があるならそれを展開すればいい。まあ、仏教用語なんて堅苦しいお名前を出したけれども、俺には学がない。たぶん、君程もない。だから『世間』という言葉についてのうのうと怪しげな文献や都市伝説を引用して使つたりもできる。逆を言えば、正しいニュアンスの『世間』という意味を知らない。つまりだ、俺は君の話を聞きたい」

「あたしの話ですか？」

返答はない。あたしは、頭の中を少し探つてみて、そしてようやく「他愛もない話題」を見つけることに成功した。おじさんは相変わらず背中を向けている。隣からボウルを引つ張つてきた。

「（この間見た夢なんですけれど、それでもいいですか？」

「夢？ なかなかいい趣味をしてると思うよ」

話してごらん、とでも言うかのようにおじさんはそれつきり口を閉ざした。

「やたらと月が綺麗だった晩に見たんです。だからと言って、月が出てくるわけじやありませんが……」

＊＊＊

目が覚めたら、真っ白の部屋にいた。纏っている服も、真っ白のワンピースだった。こんな服何年振りだろう。なんかのゲームの序章みたい。「ココカラ脱出シマセンカ？」なんて、電子音が問い合わせたのなら完璧になつたはずなのに。でも、ここがゲームの中なんて夢^{ゆめまぼろ}あるわけないわ。あたしはあたしの自我があるし、そもそも非現実的だもの。それを言つてしまつたら目が覚めたら知らない部屋にいるっていうこの状況だつて十分非現実だけど、もしか

したら誘拐されたり、乱暴されそうになつてしたり、そういう状況だつて考えられる。寧ろそつちのほうが現実的だなんて、自分で考えてちよつと怖くなつた。だつてその考え方で言つたら、殺されたり乱暴されたりするのつてあたしじゃない！ ああ、そつか、ここでいつまでもダラダラしているわけにもいかないかもしねれない。白いベッドの上、とりあえず地に足をつけようと思つて裸足で白いタイルの上に足を下ろす。白いタイル、ペタペタして気持ちが悪い。足にタイルが吸いついてくる。逆かな、タイルが足に吸いついているのかも。タコの吸盤みたいな凸凹がついたタイルを想像して一瞬ひやつとしたけど、タイルを見たらそんな凹凸はなかつた。でも、よくよく見るとモザイク模様みたいに一つ一つタイルの形が違うのね、何かが描いてあるみたい。よくよく目を凝らせども、すべて白のそのタイルが何を意味しているのかはわからない。せつかくおしゃれなのもつたいたない。

白のペティギュアのはがれかかつた足（こんなな塗つた覚えがないのに、もはやここまで徹底されて

逍遙幻草道
いると宗教的な臭いまで感じてしまう）から、視線を少しずつ上にあげていく。白いタイル、タイル、そして見つけたのは誰かの腕だった。肘から下。一瞬悲鳴をあげそうになつたけど、思つてはいたよりもずっと頭の中は冷静だった。悲鳴を上げるよりも前に右手が口を押さえて、あたしの胸の動悸は左手ですぐにおさめられた。腕に近づいてみる。どこかで見たことがあるような気がしたけど、よくよく考えたら腕なんてどこでも見るよね。あたしの体にもついているもの。ところで、これは誰の腕なんだろう。

腕の前に体育座りをしてみた。何か棒はないかなと思つたけど、見当たらない。しようがないから触つてみると、なんだか粘土みたいで、ちよつと冷たい。不謹慎だけど気持ちがよかつた。断面が赤黒いから、たぶん本物なんだろう。これは右腕らしい、人差し指の付け根に大きなペンダコがある。普通に鉛筆を持つていたらできるはずの無いペンダコがそこに確かにあつた。もしかしてあたしが好きな人の腕かな、なんて思つたら急に愛おしく感じた。あの人差し指の付け根にも、奇妙なペンダコがあつた

のだもの。

この部屋のどこかの時計の針がガチンと音をたてて時間が経過していることを告げる。時計を探して目を凝らせども、見つけることは出来なかつた。とにかく、腕の持ち主を探さないといけない気がして、あたしは腕を抱えてみた。重かつた。そして、妙に腕に吸いつくように軽かつた。腕つて、これくらいの重さなんだ。そしてこの人の腕はあまり筋肉がついていないみたい。脂身もないみたい。細い。ますますあの人姿が重なる。そして、腕を拾つて抱えると、いろんなものが見えてきた。まずは足元に落ちていたあたしのメガネ。メガネをしたとたんにあたしの目に映る真っ白な部屋。真っ白にまぎれて家具家電が置いてある。テレビみたいなもの、テレビだとしたらたぶんアナログ。ソファ、白。チエスト、白。花、白。茎まで白。病院だってこんなに白くないのに。そして、白い扉。あたしは、腕を抱えたまま扉を躊躇なく開いた。考えて見れば扉の外にはこの腕を切り落とした殺人（？）鬼がいるかもしれないのに。向こうに出ると、さつき出てきたは

ずの扉には鍵がかかる。灰色のコンクリートの通路に取り残されたのは、細い腕と白いあたし。

自分の足音なんて聞こえないふりをしながら歩いていく。通路の向こうは見えない、暗くなつているの。灰色のコンクリートの中では、特に色がつけられていいわけでもないこの腕も白い。

一人きりで、果ての見えない廊下を歩いていると「この腕は誰のものなんだろう」って、考え込んでしまう。あたしが好きなあの人の腕なら、幸せになれるのに。あたしが嫌いなあの女の腕なら、今すぐ捨ててやるわ。

装飾も何もない灰色の廊下をずうっと歩いて行くと、ついにつきあたりの壁に辿りついた。壁に辿りつくと扉が現れる。今度は灰色の扉。開けて見ると、また白い部屋。けれどさつきの部屋とはなんだか違うみたい。見渡してベッドに眠る誰かに気付いた。その「誰か」はあたしが大好きな人ので、そしてちょうど、右腕が欠けていた。

「それで、お嬢ちゃんはその人をどうしたんだい？」
「別に、どうもしませんよ。それでお終いです」

「ふうん、本当に夢の話なんだね」

「本当も何も、嘘なんか吐いてませんよ。証明でき

ないですけど」「証明は難しいだろうね。まあ、結構面白かったよ。はい、ちょうど焼きあがつたし」

「それだけですか？」
「それだけって、どういうことだい？」

「あたしはいっぱい喋りました。おじさんの番ですよよ」

「ふうん、君は俺の話を聞きたいというのかい。なかなか面白いとは思うよ。まあ、俺だつて、多少、お嬢ちゃんよりはずっと長く生きているからね。それこそわからないよ、もしかしたら八百比丘尼みたいな存在かもしれないし、唯の的屋の人間かもしれない。ただ、ただねえ、お嬢ちゃん。客商売をする身の人間が、どうしてまず相手の人間に喋ろうとさ

せたのか、お客様にわざわざ口を開かせたのか、わかるかい？」

「それは、そういうサービスか何かじやなくて、ですか？」

「サービス！ そんなものがあつたら素敵だね！ 言つたか忘れたけど『俺は君の話が聞きたい』から君から話を聞きだしたんだ。つまり、自分の話はしたくないのさ。だけどさ、それはタブーだよ。お客様を煩わせるわけにはいかないし、お客様が俺の話を聞きたいというなら話さなくてはいけない。だけどね、お嬢ちゃん、タブーの度合いって言うのもあるのさ。万引きが見つかりそうになつたから店員を殺すだなんてこと、ありえないだろ？ 俺の話はそれくらいまでに面倒臭い。俺は君なんかに比べて随分と濃密な人生を、君よりもはるかに多く積み重ねてしまつたのさ。そんなのは必ずしも褒められたものじゃない。君の思考範囲では収まらないような生きざまだよ。だから、こんなところでタコ焼きを焼いているんだ。いいかい、これは優しさだよ」

「優しさ？」

「そう、俺がタコ焼きを焼いている理由はギガ級の生きざまをせめメガ級まで落とすためだよ。それ以上首突っ込んだら、お嬢ちゃん、俺と同じものになつてしまふかもしないね。まあ、それはそれで面白いかもしれない。俺はお嬢ちゃんと気が合うのかかもしれないね」

「確かに、そうですね」

ギガ級の生きざま、という言い回しが妙に心に引つかつた。心に残つたわけではなく、それは違和感に近い感覚で沈殿する。

「そう、はいはい、早くお行き。客が来なくなつてしまふよ」

「え、ああ、ありがとうございます」

大きめのタコ焼きが五個、一つのパックの中に所狭しと並べられていた。受け取つて、お金を払つて、軽くお辞儀をして去る。振り返るとあのタコ焼き屋さんが無くなつてゐるような気がして、怖くて振り返ることができなかつた。なんて、非現実的な店なんだろう。踏切をそのまま通り過ぎて、少し道からそれで、遮断機に背を向ける形であたしは立つ。タ

コ焼きはまだ温かかった。

嘘なんか吐いてない。ただ、その先を言つてないだけ。あの人を見た瞬間、あたしはもう理性なんてなかつた。動悸が止まらなくなつて、目は見開かれている。歯がむき出しになつて、あの人腕を握つてゐるあたしの手には、異常なまでの力が入り、爪が食い込む。歯を食いしばる時に、口の中まで噛んでいたらしく、口の中に血の味が滲む。その味で、あたしはやつと理性を取り戻した。ああ、あの人のお綺麗な腕に、あたしなんかの爪の跡をつけてしまった。ペたりと座りこむと、足元にナイフとフォークが血にまみれて転がっているのを見つけた。そこで、本当に目が覚めた。

あんな夢を見た理由は知つてゐる。知つてゐるけど、知つてゐるからと言つてどうにもならない。自己嫌悪の中に沈んで、沈んで、あたしは帰つてこられなくなる。帰つてくるつもりがないの。

「この遮断機の傍で、」

あの人選んだのはあたしじやない人だつた。嬉しさで頭がいっぱいになる、あの気持ちをあたし以

外の人間からあの人も受けっていたなんて、許せなかつた。けれどそれ以上に、あんな表情をするあの人を見るのが辛かつた。あたしのこともある風に見てほしかつた。それなのに、あたしが無理にあの人細い腕を掴めど、あの人、振りほどいて先を歩いてしまうの。耳を劈くような警報機の音、背中を通る電車、あたしにはもうそんなもの見えない。——この遮断機の傍で、あの人は、あの女と、——今、あたしが立つてゐる、この場所で、あの人は、あの女に、

「あの、女に」

あたしだつて、あの女をあの人から引き剥がして、あの人を踏切の中に突き飛ばしてしまひたかつた。そうしてしまつたら、あの人の中であたしは永遠だもの。してしまひたかつたのに、そんなこと出来なくて、遮断機の向こうにいるあたしは、今みたいに電車が来て、通り過ぎてゐる間に、その場から離れた。サヨナラしたの。「グッバイダーリン、幸せな夢でした」なんて気取つて言えたのなら格好よかつたのかしら。でも、そんなの、無理だわ。あたしは、

逍遙幻草道
どんなに強がつたって、異端ぶつたって、怒つたつて、狂つたつて、人間の皮を脱ぐことができないんだもの。

電車は通り過ぎたらしい。遮断機を背にしたままで、夕日が目に染みるその場で、タコ焼きを一つ口にする。タコ焼きは真っ赤に染まる。大きな大きなタコ焼きは一口では食べれない。一口食べて、いつたん口を離すと中から人間の指が出てきた。大きなタコのある、少し骨ばったながい人差し指。あの人の指であるはずなんてない、わかりきっているのに、不思議とその指は怖くなくて、笑みがこぼれた。